

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 8 日現在

機関番号：32686

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26580117

研究課題名(和文) 東京都内大学における発音教育と教員の教育的決定の調査

研究課題名(英文) An investigation on English pronunciation teaching and teachers' pedagogical decisions at universities in Tokyo

研究代表者

横本 勝也 (YOKOMOTO, Katsuya)

立教大学・ランゲージセンター・教育講師

研究者番号：30646740

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、東京都内の大学の英語教師が発音教育に関してどのような教育を受け、関心、信条を持って、発音指導を行っているのかという現状調査に加え、日本人英語学習者の発音をどのように診断し、教育的決定を下すのかを調査した。その結果、発音教育への関心が高く、発音教育に関する教育を受けた教師は、発音指導に関する知識も自信も持ち、発音指導を行うということが分かった。また、発音診断結果は教師間でも様々で、意味が通じる上で重要な母音に関しては、問題点を的確に指摘することが難しく、指導しないという決断を導いているおそれがある。これは教師教育によって克服すべき課題だといえる。

研究成果の概要(英文)：This study investigated the university-level English teachers' backgrounds including their educational background regarding pronunciation teaching, interests in and beliefs about pronunciation teaching, and pronunciation teaching practice. Also, their instructional decisions based on their diagnosis of the Japanese learners' pronunciation were examined. As a result, the teachers who are interested in pronunciation teaching and have received pedagogical training tend to have the knowledge about the pronunciation teaching, gain confidence in teaching pronunciation, and, in fact, teach pronunciation. Also, the results of the diagnosis vary. It seemed that identifying problems in vowel productions, which have been found to be crucial in communication was difficult, and the difficulty appeared to lead to the decision not to teach vowels. Given the importance of vowels for effective communication, this problem with identifying vowel errors should be dealt with in the teacher training.

研究分野：英語教育

キーワード：発音教育 英語教育 ニーズ評価 教育的決定

1. 研究開始当初の背景

(1) 英語の発音教育に関する研究は、本研究開始当初、ほぼ学習者に焦点を当てた、発音習得に関するものがほとんどであった。第二言語あるいは外国語として英語の発音を習得するメカニズム、そして発音習得と年齢との関係を研究テーマとする研究者は多くいたのだが、教師を対象とした発音教育となると、それを研究する研究者も研究対象となる場合も限られていた。

(2) 発音教育をテーマとした研究としては、発音教育の実態調査が行われていたが、その多くはアメリカ(Baker, 2014)、カナダ(Foote, Holtby, & Derwing, 2011)、イギリス(Burgess & Spencer, 2000)、オーストラリア(MacDonald, 2003)の英語圏で行われたものがほとんどで、非英語圏ではヨーロッパ諸国(Henderson, Frost Tergujeff, Kautzsch, Murphy, Kirkova-Naskova, Waniek-Klimczak, Levey, Cunningham, & Curnick, 2012)での調査に限られていた。そのため、日本における実態調査が必要であった。また、Saito & Lyster (2012)のように、主に発音指導法の効果を実証する研究に着手する研究者が増えつつあったが、実際に学習者の発音を教師がどのように診断するか、その診断を基に発音指導をするかどうか、および指導する場合、どのような指導法を用いて指導するかといった教育的決定に関する研究はなく、本研究のテーマは比較的新しい着眼点を持った研究として始まった。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的はまず、東京都での英語発音教育の実態を調査することにあった。英語の発音は受験では扱われていないため、受験英語を終えた大学での英語発音教育の実態調査を行うことを目的とした。ここでは、大学における英語教員は発音指導を行うかどうかに加え、英語教師歴、発音教育に関する教育を受けてきたかどうか、発音教育に自信があるかどうか、発音教育に興味を持っているかどうかなど、発音に関する教育的決定に影響すると考えられる要因を調査することを目的とした。

(2) 本研究にはもう一つの研究目標があった。それは、ニーズ分析から教育的決定までの過程に関する調査を行うことであった。英語教師が実際に英語学習者の発音を聞いて、どのようにそれを診断し、その診断結果を基に発音指導を行うかどうか、また、発音を指導するならばどの指導法を用いて指導するのが効果的だと考えるのかをより詳しく知ることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 東京都の大学で行われている外国語としての英語科目で、発音教育がどの程度取り入れられているか、また、実際に教えている教員の発音教育に関する興味、信条、教育的背景、教師歴などを調査するため、アンケート調査を実施した。質問紙はオンラインで作成

し実施もオンラインで行った。東京都の大学教員が対象だったため、東京都内で行われた英語教師向けの学会を通して参加者を募り、また、参加者を通してさらなる参加者を雪だるま方式に募った。

アンケート調査には計 92 名の教員(男性 47 名、女性 45 名)が参加した。調査時の参加者の年齢は 28~65 歳、平均 47.6 歳で、教師歴は 1~38 年、平均 15.6 年であった。出身国は表 1 の通りで、過半数以上が日本人、次いでアメリカ人、イギリス人が多く参加した。

表 1. アンケート調査参加者出身国

国	%		
日本	58	ニュージーランド	3
アメリカ	16	南アフリカ	3
イギリス	13	中国	2
オーストラリア	3	フィリピン	2
カナダ	3	韓国	1

アンケート調査の結果は、SPSS AMOS を用いて、共分散構造分析を行い、発音教育に関する興味、発音教育に関する教育の期間、発音教育に関する教育の有無、発音教育に関する知識レベル、発音教育に関する自信、および発音教育で用いる指導方法とそれぞれの頻度のそれぞれの要因をモデル化した。

(2) 英語教員が実際に学習者の発音を診断し、その診断結果に基づき、どのように教育的決定を下すか、その過程でどのような要素を考慮するのかを調査するため、反構造的面接を用いた。この面接にはアンケート調査に参加した教員のうち、9 名が参加した。また、初級から中級レベル大学生 10 名の音声を録音し、その音声を参加者が聞きとり、それぞれの学習者の英語を診断した。参加者には診断時に気になった点を記入してもらい、そのノートを基に、この 10 名の学生を一つのクラスで 1 学期間教えるという仮定で、発音に関して、またそれ以外で何を教えるかを決定してもらった。また、それぞれの教育的な決定についての理由付けをしてもらった。学習者の音声を聞き取る時点から、教育的決定の理由を話す時点までの一切を録音し、録音を書き起こし、それを内容分析した。

4. 研究成果

(1) 92 名の参加者のうち 82 名は何等かの形で発音指導を行っているが、10 名は全く発音指導を行わないことが分かった。また、発音指導を行う教員のほとんどは共通して複数の指導法を用いて発音指導を行っていることが分かった (Range = 1-7, M = 4.94)。

(2) また、音声に関する知識と有効的な発音指導方法に関する知識を 5 段階で自己評価してもらった結果、発音そのものの知識に関する自信 (M=3.6) が、指導法の知識に関する自信 (M=3.1) を上回った。

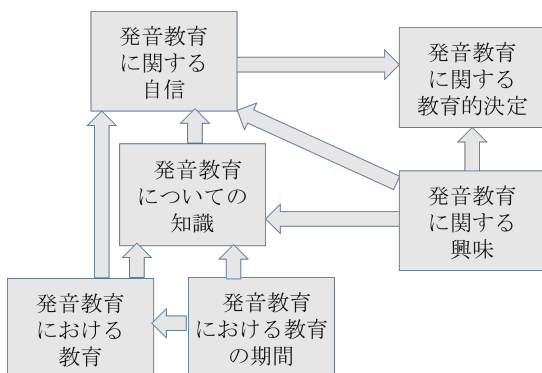
(3) 発音教育に関する興味に関しては全体的に関心度は高かったが、なかでも実践的な発音指導法に関する関心度が高く (M=3.86)、発音教育に関する理論への関心度 (M=3.49) を

上回った。このことから、多くの教員が実践的な発音教育法を知りたがっていることが分かった。

(4) 発音指導をするかしないかという決定についてであるが、回帰分析の結果、発音に関心にある教師、発音指導について学ぶ意欲のある教師、発音教育に関する文献に関心のある教師、そして、教師には発音学習を促すことができると信じる教師は発音指導を行い、逆に、発音に関心のない教師は発音指導を全くしないということが分かった。

(5) アンケート調査に含まれていた項目は、発音教育に関する自信、発音教育についての知識、発音教育における教育とその期間、発音教育に関する興味、発音教育に対する信条、発音教育をする指導方法の頻度であったが、それぞれの項目毎に集計し、その数値を用いて、発音教育における教育的決定をモデル化した。発音教育に対する信条に関しては、モデルのどの位置に挿入しても、モデルの適合度がそれほど高くなく、モデルから除外することとした。発音教育に対する信条を除外した残りの項目を発音教育における教育的決定に導くと予想される順に並べ、SPSS AMOS 22.0 を用いてモデル化を図った。その結果、発音指導法のうち、明示的な発音指導法 ($\chi^2 = 8.842, df = 7, p = .264, CFI = .982, RMSEA = .046$)、発音の手本の使用 ($\chi^2 = 11.802, df = 7, p = .107, CFI = .953, RMSEA = .074$)、機械的なドリルの使用 ($\chi^2 = 11.826, df = 7, p = .106, CFI = .943, RMSEA = .074$)、偶発的修正フィードバック ($\chi^2 = 13.291, df = 7, p = .065, CFI = .929, RMSEA = .084$) において適合度の高いモデル化に成功した。これらをまとめると、図2のようになり、このモデルから、発音教育に関する教育を受けること、またその期間が長いこと、発音教育への関心が高いことが、発音指導を頻繁に行う要素の原点となることがわかった。つまり、発音教育に関心があり、発音教育に関する教育を受けると、発音教育に関する知識レベルが向上し、自信につながり、発音指導を行うという結果を導くということとなる。特に、モデルの起点が発音教育に関する興味と教育の期間になっていることから、教師教育で発音教育に関心を持たせること、また発音教育についての教育を展開する必要性が明らかになり、当該分野に大きく影響を与える結果となった。

図2 . 発音教育に関する教育的決定モデル



(6) 学習者の音声を聞いた上での発音診断とその結果を用いた教育的決定に関する面接から、発音診断結果にも教育的決定にも、注目すべき点が見つかった。まず、子音、母音、超分節音素 (Suprasegmental) と分けた際、子音と超分節音素に関しては、多くの教師が発音上の問題を指摘した。子音に関しては、/l/と/r/の区別についてはほぼ全員の教師が指摘し、その6割強がこの音素を指導すると決定した。しかし、母音となると、問題点を指摘した教師はいたが、ほとんどのケースがどの母音に問題があるのかを指摘できず、結局指導するという決定には至らなかった。ここでは、Jenkins(2004)の提案する Lingua Franca Core をはじめとする発音要素の重要度を考慮する必要がある。近年では、理解度 (Intelligibility) を左右する発音要素の指導を優先すべきだと言われているが、そのひとつに母音が挙げられおり、母音の指導の重要性が明らかになっている。本研究の結果は、母音の問題点を的確に診断する診断力を養う必要性と、その診断結果から母音指導に導く必要性があることを示唆している。また、超分節音素に関しては多くの教師が問題点を共通に指摘し、指導するという決定を下したが、これは超分節音素が理解度を大きく左右する要素であることが分かっている (Hahn, 2004) ため、教師の判断は理にかなっていない。これに限らず、教師は様々な側面を考慮しながら、教育的決定を下していることがわかった。まず、学習者の音声から頻度の高い発音の誤りを中心に指導するという方法が浮かび上がった。しかし、教師の診断そのものが、教師の主観によるものであるため、注意が必要だということも分かった。特に、発音の問題点の中から、指導する項目を選択する場合、理解度に影響する発音要素がどうかという視点で決定を下すケースが多くあった。同時に、教師は経験上多くの日本人の英語を聞いており、他の英語 (母語) 話者と比較すると、理解度が必然的に高くなることを経験上分かっていること、また、それを発音診断には反映していないことが分かった。また、これまでの教師としての経験を振り返り、発音指導そのものはあまり効果がなく、通常は指導しないことも分かった。

<参考文献>

- Baker, A. (2014). Exploring teachers' knowledge of second language pronunciation techniques: Teacher cognitions, observed classroom practices, and student perceptions. *Tesol Quarterly*, 48(1), 136-163.
- Burgess, J., & Spencer, S. (2000). Phonology and pronunciation in integrated language teaching and teacher education. *System*, 28(2),

191-215.

- Footo, J. A., Holtby, A. K., & Derwing, T. M. (2012). Survey of the teaching of pronunciation in adult ESL programs in Canada, 2010. *TESL Canada Journal*, 29(1), 1-22.
- Hahn, L. D. (2004). Primary stress and intelligibility: Research to motivate the teaching of suprasegmentals. *TESOL Quarterly*, 38(2), 201-223.
- Henderson, A., Frost, D., Tergujeff, E., Kautzsch, A., Murphy, D., Kirkova-Naskova, A., Waniek-Klimczak, E., Levey, D., Cunningham, U., & Curnick, L. (2012). The English pronunciation teaching in Europe survey: Selected results. *Research in Language*, 10(1), 5-27.
- Jenkins, J. (2004). Research in teaching pronunciation and intonation. *Annual Review of Applied Linguistics*, 24, 109-125.
- MacDonald, S. (2002). Pronunciation-Views and practices of reluctant teachers. *Prospect*, 17, 3-18.
- Saito, K., & Lyster, R. (2012). Effects of form focused instruction and corrective feedback on L2 pronunciation development of /ɪ/ by Japanese learners of English. *Language Learning*, 62(2), 595-633.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 2 件)

Yokomoto, K. Instructional decisions on EFL pronunciation teaching and teachers' beliefs and interests. *JACET-LTC Bulletin*, 査読有, 2017 (in press).

Yokomoto, K. Teacher training and approaches to EFL pronunciation teaching. *Proceedings of ISAPh2016-Diversity in Applied Phonetics*, 査読有, 2016, pp. 137-142.

[学会発表](計 6 件)

Yokomoto, K. Diagnosis of learners' pronunciation and instructional decision-making in EFL teaching. *TESOL International Convention and English Language Expo*, 2017年3月21日、シアトル(アメリカ合衆国)

Yokomoto, K. An exploration of EFL teachers' diagnostic decisions in L2 pronunciation, *American Association for Applied Linguistics*, 2017年3月18日、ポートランド(アメリカ合衆国)

Yokomoto, K. An instructional decision-making model for EFL

pronunciation teaching, *Pronunciation of Second Language Learning and Teaching*, 2016年8月13日、カルガリー(カナダ)

Yokomoto, K. EFL teachers' interests and beliefs as determiners of their instructional decisions in the teaching of pronunciation, *JACET 言語教師認知研究会*, 2016年7月23日、早稲田大学(東京都新宿区)

Yokomoto, K. EFL pronunciation teaching: A case of universities in Tokyo, *TESOL International Convention and English Language Expo*, 2016年4月8日、ボルチモア(アメリカ合衆国)

Yokomoto, K. Teacher training and approaches to EFL pronunciation teaching. *International Symposium on Applied Phonetics*, 2016年3月26日、中部大学(愛知県名古屋市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

横本 勝也 (YOKOMOTO, Katsuya)
立教大学・ランゲージセンター・教育講師
研究者番号: 30646740

(4) 研究協力者

アイザックス タリア (ISAACS, Talia)
ユー グオシン (YU, Guoxing)